
暴走青春 マシンガン

叶井秦雨

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

暴走青春 マシンガン

【NZコード】

N5579F

【作者名】

叶井秦雨

【あらすじ】

ノンケでもバイでも、ましてゲイでもない高校生樋口飛鳥。そんな飛鳥の前に、飛鳥に一目惚れしたという超ド級の俺様一宮聖野が現れて…！？一人の恋愛模様を中心に怪人、ヤンデレ、根暗、いじめっ子、吸血鬼もどきが織り成す青春爆走ラブコメディ。

この日本つて、いうのは平和だなあ。と常々思つ。

特に紛争もなければ日本国憲法が公布されてからは戦争とはほぼ無縁（とは言つが実際はどうなのか俺には分からぬ）。治安も良い方だと聞いたこともあるし（それが本当かは疑わしいのだけ）、事実今はとても平穏だ。

屋上から見上げる青空のなんと穏やかなことか。日本に生まれて良かった。

「燈縁君。 今日のお弁当はどうだった？」

「最高。 みほるちゃん愛してる。もういつでも嫁においで。」

視界の端にはほぼ一ヶ月ほど前漸く付き合いだした怪人と、それに見初められた大きいお友達が好きそうな容貌の少女とのラブコメが絶賛上映中だ。

こいつやつて怪人の注意が彼女に向けられたことに俺は心底ほつとしている。俺にはもう面倒見切れないね。彼女なら燈縁を難なく操縦できることだろう。

子育てが一段落した主婦とはこんな気持ちなのだろうか。ここに子離れの寂しさの表現を入れたら完璧母親なんだけど、如何せん俺は完璧母親ではないから子離れを寂しいと思つ気持ちは微塵もない。逆に清々した。

「幸せだ。」

もうカレカノ宣言した彼らの間に俺は必要ない。燈縁に捕らわれない生活……
うん。最高だね。

お前はシンデレラか、と思った画面の前のお前。若しくはお前らかも
しれないけど、お前は何もわかつてない。

さつきから言つてる様に、燈縁は怪人だ。俺の記憶が確かなら、あいつは2、3回猛獸を締め上げている。更に教科書の内容覚えるために教科書を丸呑みしたこともある。本人はケロッとしていたし、何より本当に全部覚えた。

保健室で寝ていた（この時はまだ他人だった）みほるちゃんに添い寝したり、その他たくさんのかまどちゃんの常識離れの行動…。

ある意味で自分本位。つまり我儘なのだ。自分の思い通りにならなければ思い通りにさせるという強引さで、燈籠は本当に思い通りにさせる。だから怪人。

我儘な人間と付き合つて疲れるのは当然のこと、俺はすっかり疲弊してしまつた。もともと無かつた体重が更に減つて増えなくなる程度には疲弊したのだ。責任とつてもらいたい。

「どうわナで俺の体格がヒヨロイのは完全にお前のせいだからね

「え、それは遺伝じやねーの？俺様かんけーねーもん。」

…でつかい男がもんは正直気持ち悪いだろ。うん。ありえない。ついでに俺がやってもありえない。都ちゃんや古野坂さん位の可愛い系美少女じゃないと、ね。

と噂をすると、屋上の扉（鍵は勿論俺様怪人の燈縁に武力介入してもらつた）の陰に都ちゃんの姿。彼女は明るい場所が苦手なのだ。

108

おろおろとしている辺り、『入つていいのかな…?』という感じで迷っているのだろう。俺の後輩である都ちゃんはいい子だが人付き合いがことん苦手なのだ。

「都ちゃん。」

「先輩……」

んー……あれは、笑つてゐるんだよね？喜んでる。表情が解りやすい燈
縁とちがつて都ちゃんはとつても解りにくい。ちゃんと笑えれば可愛
いだらうに、損してゐる氣がするよ。都ちゃん。

「……谷さん。こんなにちは。」

「あ……古野……坂先輩……こんなにちは。」

因みに、古野坂さんは都ちゃんにコンプレックスを抱いていゐるらしい。
それは体型の……ね、女の子は複雑だ。

都ちゃんは燈縁のことを先輩だと思つてゐるんだから気にしなくていいだらうに。そういう訳にいかないのが元ヤンデレの古野坂さんなんだろう。彼女はその昔、恋人を刺したことがあるらしい。燈縁は古野坂さん一筋だから今はテレテレみたいだけど、俺以外の奴が燈縁に近づくと彼女を中心に気温ががくつと下がる。勿論天変地異でも何でもない。

「……すかー……！……飛鳥ー！」

「……ん？」

屋上の扉を勢いよく開けいきなり現れたのは比企村守基。涙田で登場だ。彼が涙田で登場する理由なんて只一つ、

「比企村つてば俺のことやんなに嫌い？」

「うん嫌い！」

「奇遇だね俺も。」

「俺様も。」

「ふえーん！飛鳥ーー！」

灌宮禊が追いかけて来るからだ。

守基は弄られ体质で、俺も時折、燈縁と灌宮には毎回弄られている。燈縁ならば近寄らなければ万事問題なしなのだが、灌宮はそういうかない。

灌宮は守基を弄るために学校に来ているようなものだから、探し出してでも弄りに来る。

で、守基は俺に懐いているため避難場所は必然的に俺となり、こんな感じになる。

あとは俺のその後の行動により3パターンに分かれる。守基が勝つか灌宮が勝つか燈縁が横からかっさらつか。

「樋口。その吸血鬼もどきこっちにちょうどだいな。」

「いや飛鳥俺によこして、新・でこピン15連打の試し打ちに使うから。」

「飛鳥…っーー！」

吸血鬼もどきというのは、血が大好きな守基への揶揄いの愛称で、本人は立派な人間だ。ただちょっと血を舐めたくなる変態なだけで……と、今はそんなこと考えている場合じゃないんだった。

「飛鳥あーーー！」

俺の制服の裾をぎゅうっと握る守基、それを虎視眈々と狙う灌宮と兎に角でこピンがしたい燈縁。

そうそう、言い忘れてた。守基が勝つか灌宮が勝つか燈縁が横からかっさらつかの3パターンに分かれるって言つてたけど、大概は予鈴が鳴つてタイムアップ。つまり引き分けだ。

俺が決めかねてているからじゃない。一人して来るのが遅いのだ。予

鈴の2分前じゃすぐに終わる。

そして、今日も子鈴が鳴る。軽快な音楽が鳴り響く。

「あうあう……よかつた……僕は今日も生還したよ……っ……」

新・でりくン15 放課後だ。 放課後教室で新・でりくン15

「ひ、燈縁くん…明日チャーハン作つてあげるから…ね?」

明日はどうなるのか、それは彼らの足の速さと明日の俺の機嫌のみぞ知る。

何はどうあれ、今日のお弁当タイムは終了、各自片付けに入る。次の時間はなんだつたつけ？確かに日本史だつた気がする。

「飛鳥！明日は俺様の大好物チャーハンだつて！」
「はいはいよかつたねー。」

明日は明日でもまた同じような感じなんだろうな、と他愛のないことを考えながら、俺は紙パックのいちごミルク豆乳カフェオレを飲み干した。

その翌日、俺の人生を大きく変える出会いがあることを、俺は知らない。

本編に入る前に登場人物紹介（前書き）

明らかに活用できない紹介ページ。

読まなくても本編に何ら影響はありません。無い様にしたいです。

本編に入る前に登場人物紹介

樋口飛鳥
ヒグチアスカ

誕生日：01/20（山羊座）

血液型：O型 Rh -

身長：174cm

体重：59kg

家族：両親、兄

常識人。でも少し変わってる。独り言を呟くことがある。人に興味を持ったことはない。怪人にはある。

曰く「恋愛はしない主義」で人を好きになつたことは一度もない。昔から辛辣で、クールと言えばクール。

容赦、同情、情けの三つは基本的に無い。

普通の容姿だと言つているが飛鳥の色気で撃破された生物は数知れず。

そんな生物には怪人が制裁を加えます。

怪人が側にいたもんだから告白した人は最早勇者。でも本人は容赦なく断る。

割と料理が上手で燈縁もみほるも絶賛している。

いちごミルク豆乳カフェオレを飲むなど好き嫌いはない。

特技はバトミントン。

二宮聖野
ニノミヤセイイ

誕生日：04/29（牡牛座）

血液型：B型

身長：185cm

体重：76・2kg

家族：両親

俺様気質。割と尊大。黙つていればかっこいい。

世界に平伏すなら俺に平伏せとか言い出したりする。

でも常識は持ち合わせていてる。

飛鳥が好みだつたらしく思いきり告白した『テンジャー及びチャレンジャー』なお方。

要求に拒否権をくれないあたりもしつかり俺様。

飛鳥に関してのみ妄想像力がたくましい。

頭も運動神経も中の上。

人の話を聞く気は基本無い。なので飛鳥から見れば一番近寄りたくないタイプ。

幼いころから親の転勤であちこち転校を繰り返していたがよつやく落ち着いた。

が家にはあまり思い出がないので偶に母方の祖母の家に頻繁に出入りしている。

祖母は既に亡くなっているが家族はみんな出入りしていることを知つてるのでガス、電気、水道は通つていてる。

実は『道を嗜む。

秦戸燈縁

カナトヒエフ

誕生日：04/01（牡羊座）

血液型：B型

身長：186cm

体重：77kg

家族：母（別居）

怪人と言つても寸分違わない。やつぱり黙つていればかつこいい。やりたいことをやりたいように好きなだけ楽しむ。

みほるちゃんは俺の嫁。

飛鳥に手出したら殺つちゃうからな。

常識が通用しない。

みほる至上主義の変態。UでもいいけどみほるちゃんがUなら俺はMでもいいと本氣で思つてる。

マシンガン所持。六法全書なんて彼の前では紙切れ同然。決して馬鹿ではない。頭が足りないだけで。

誕生日的に人間として生まれたという事実が嘘くさい氣もする（飛

鳥談）

両利き。目も足も耳も両利き。

存命している家族は母親のみ。実は父親は刑事だった。

古野坂みほる
コノサカミホル

誕生日：11/11（蠍座）

血液型：O型

身長：154cm

体重：46kg

家族：両親、妹

大きなお友達が好きそうな姿をしたおとなしい少女。

人を見る目があり空気が読めるいい子もある。

逆にギャル4人の恐喝に対し喋るのすら馬鹿らしく思つなど肝つ玉の大きな所もある。

基本的に面倒見は良い。

実は料理が苦手。

出るところ出でないことがコンプレックス。

誰の手にも負えない燈縁を操縦できる1人。

その昔、好きな人を刺したり恋敵に毒を飲ませたり事故と見せかけて怪我をさせたり色々貶めたことも有る。所謂ヤンデレ気質。まだ誰も殺していない。

燈縁が他の女子と居ることがない（というか常人は近寄れない）ため今はそのなりを潜ませている。

飛鳥といるのは良いらしい。

当初お友達から始まつた燈縁との関係だが7カ月を経て恋人同士になつた。

濯宮禊スヌミヤミソケ

誕生日：06/21（双子座）

血液型：A B型

身長：188cm

体重：77kg

家族：叔父夫婦、姉、弟

実は生徒会に所属しているいじめっ子。

ツンツンツンデレという難攻不落な男。

寧ろツンデレってレベルじゃない。鬼畜デレ。

でも好きな子には優しく接してしまう。調子出ない。

好みが天然だから悪意をとらえてもらえない。

特技はワープロ早打ち。

甘い物が大の苦手でコーヒーでも砂糖が少しでも入つていると飲めない。

冷え性。温かいものが好き。

谷都
タニミヤコ

誕生日：08/03（獅子座）

血液型：O型

身長：159cm

体重：50kg

家族：両親、弟

根暗で引っ込み思案。人づきあいが苦手で、まともに人の目を見て話せない。

ネガティブでなんでも悪い方へ考えが行く。

顔に自信がなく、髪の毛も前をがつたり伸ばしていた。

そのせいでついたあだ名は『闇子』。本人も気にしている。

実は言う程顔は悪くない。磨けば光るタイプ。

飛鳥のものをはつきりと言うところに憧れてい。

体型の割に胸があり、みほるのコンプレックスを刺激する。本人に他意はない。

だつて本人も体の割に大きい胸氣にしてるし。

美術部所属。将来の夢は服飾デザイナー。それだけに裁縫は得意。

コーヒーが嫌い。

比企村守基
ヒキムラサキ

誕生日：08/07（獅子座）

血液型：A型

身長：176cm

体重：63kg

家族：姉、兄

弄られつ子。血を見ると舐めたくなる。禊の獲物。

飛鳥にめちゃくちゃ懷いている。飛鳥の血液の味が好みのため。
前向きな性格。悪いことがあっても大体1分で立ち直る。
そこをことじことく崩される。

割とテンションが高いのかかもしれない。

無駄に体が丈夫。3時間雨に打たれても問題ない。
ある意味耐久度はびかいち。
三年前両親を一気に亡くし姉と兄とで暮らしている。
本人もバイトをいくつか掛け持ちしている。

SHOT 1・皐月晴れの日常崩壊

それは、昼休み開始直後の出来事だった。

「お前ちよつとこいつちこい。」

「え」

手首ふん掘まえられ俺は引きずられていく。

見も知らぬ男。体型は…丁度燈縁と同じくらいだろうか。

「何。」

「黙つてついてこい。」

「ついてこいつて」

引っ張られてんだからついていかざるを得ないんじやないか？
横暴だ。あまりに横暴。

こんな風に横暴な人間は初めてだ。勿論燈縁は怪人なので人間という枠には入れてない。入れてやるもんか。

「この辺でいいな。」

連れてこられた場所は体育館の裏手。ケバい戦隊ギャルナンジャーの巣窟だ。

彼女らは何時ものように原型を留めない程度の厚化粧をしていた。
それ以上重ねてもしようがないだろうに…。

「おい。てめえら邪魔だ。」

どつか行けと言わんばかりの威圧感。俺に向けられてないのに分か

る位のものだ。向けられた方は堪つたもんじやないだらう。

それに俺は（というか燈縁が）、彼女らの住処を荒らしてしまつたことがある。相当怖がらせてしまつたらしくそれ以来廊下で鉢合わせても顔を青くされ、目も合わせてもらえない。頭がイカレてるという噂も払拭出来ぬまま今に至るのだ。

と言つわけで男の後ろにいた俺に気がついた彼女らは、やはり顔を青くし、やばい樋口だと小声で何かを囁き合いその場から足早に逃げ去つていつた。

「へえ。お前あいつらに何かした訳？」

心底愉快そうに笑う男はよく見るととも整つた顔立ちをしていた。すつと通つた鼻筋に、少しだけ釣り上がつたヘーゼル色の瞳。栗毛色の少しあはね気味の髪。そんな綺麗な顔の男が目の前で笑つていて俺は…心底イラついた。

トキメク？そんなことはない。俺はゲイじやないし。そこまで人に興味を持てない。

それに、幾ら顔が良いからつて、中身が良くなきや話にならない。

俺はこういう横暴なタイプの人間は苦手だ。

「さて、」

ひとしきり笑つた後、男は俺を体育館の外壁に押しつける。肩に手を置いてそのまま押し付けたのだとと思う。

かなり大きな音がしたが、誰も気がつかない。

当たり前だ。今は昼休み。体育館では何人かの生徒がバスケットやドッヂボールに興じているのだ。その喧噪に比べれば、俺の重さの無い体がぶつかつた程度の音など聞こえやしない。

「…なんだよ。」

「人気の無いところに来たんだ。解るよな？」

左手首を取られる。そして、口づけられた。

「手首へのキスは、欲望つて意味なんだってよ。」「へえ…。」

男はどうでもいい知識を俺に植え付ける。

しかもこのシチュエーションでその知識…俺は多分告白される。今までに数回あったことだ。昼休みや放課後に人気の無い場所に呼び出され、告白を受ける。

しかし名前も教えていない同性に告白とは、この男面食いか？

「俺のになれよ。樋口。」

「断る。」

「なれ。」

「初対面の人間にいきなり告白するよつたタラシ及び浮氣癖予備軍の傍には居たくない。」

「初対面…？ああ、忘れてた。俺は一宮聖野。お前に一目惚れした。だから俺のになれ。」

…「…」いつ、話聞く気ないな。

仕方ない。ここはあの作戦で行こう。

「あのさ、俺お前みたいな人の話も口クに聞けない低脳で我儘で横暴で変態な人格破綻者の恋人になんてなりたくないから、諦めてくれない？はつきり言つて迷惑なんだけど。てかマジうやー。」

半分以上は本音で構成されている暴言を、なるべく感情が出る様にして言う。これは飽くまで丁重に何度もお断りしているにも拘らず

まだ食い下がつてくる男共（告白してくるのは男だけでなく女もいる。けど女には使わない事にしているから男だ。）を強制的に諦めさせる、最終手段の一歩手前の手段だ。言つてしまえば俺は口が悪いですよといつセルフネガキヤンである。

「…。」

流石に諦めてくれただろうか？立ち直れなくなるかもしないけどそんなの俺の知つたことではない。俺は自分が大事なんだから。

「…お前。」

「何？」

「気に入つた。」

「…えつと…は？」

何この人…。マゾ？マゾなのか？なじられるのが快感つていうあれ。

「嘔吐きは好きじゃないから。丁度いい。」

正直ここまで言つとは予想外だつたな、と奴は言つた。

まあ、俺も正直、少し頑張つたなと思ってる。初対面の人間をここまで罵つたのは生まれて2、3回あつたかもしない。

「いや、あのさ。何とも思わないわけ？俺今初対面のお前を思いつきり最低呼ばわりしたんだよ？幾ら本當でも嫌にならない？」

「今さり気無く酷い事言つたよな。大体合つてるから特には思わない。俺は低脳で我儘で横暴で変態な人格破綻者だ。」

自覚してんなら直せよ。とは敢えて言わなかつた。

「て、んなことばぢうだつていい。樋口。俺を好きになれ。」

「拒否権発動。」

「効かないなー。」

「チートかよー。」

ふと、こいつの扱いが燈縁を扱うときと同じよくなつていてる事に気がついた。

こいつは俺様度が強く、ある程度の常識を持ち合わせていてる燈縁。つまり何が言いたいか。こいつは燈縁そつくりだ。顔でなく中身が。物は違うけど根っこが同じなのだ。

違う色に同じ量の黒。

黒い赤と黒い緑。

だからといって俺の次の行動は変わらない。

「…痛つ」

「あ、わりいわりい。大丈夫…か…？」

あいつの手が俺の肩から離れた隙に、俺はポケットからホイッスルを取り出す。そして思いきり吹いた。（勿論その間、一宮は睡然呆然していた。）

「呼んだか？」

「お食事中悪いね。」

「比企村置いてきたし、チャーハンならもう食べ終わつたから気にすんな。」

上から降つてきたのは燈縁だ。このホイップスルで何時でも何処でも呼び出し可能。どうやって聞いてどうやって来てるのか俺もわからない。

まあ、怪人だから気にしないけどね。

「んで、なんの用だ?」

「退かしてほしい者があつて。」

これが最終手段だ。

あまり使いたくない（というか使えない）手なのだが、俺は腹が減つていいのだ。さつさと終わらせたい。

それに、燈縁に似たこいつのことだ、多分平氣だろ?。多分。

「ふうん…あれ、ね。」

「そう、あれ。」

「あれつて…俺?」

「うん。俺の田の前に居る茶髪のはねつ毛の男とも言つね。」

「素直に名前で呼べばい」

パーンッと乾いた音がした。

明らかに銃刀法違反のマシンガンが火を吹いたらしい。

「どうか、あれか。あれ。あの、台所によく居る。」

「俺の存在は生命力バリ高の虫とタメか。」

「あはは!俺様にとつてはそれ以下だ。」

「はは…。理由を訊いても良いか?」

「俺様はてめえが大嫌いだ。」

その言葉を皮きりに、2人は追いかけっこ（という名の生死をかけた鬼ごっこ）を開始した。一宮と燈縁の速さは互角で、銃声が鳴り響く中、一宮は必死に逃げていた。

…これで俺の平穏は保たれた。

「…空が、青いなあ…。」

空腹を思い出して校舎に戻る途中、空を仰ぎ見る。再来週には体育祭が控えていた。

SHOT-2・体育祭前日（前書き）

一年以上も間を開けてしまい、申し訳ございませんでした。
待っていてくださった皆様方に、お詫び申し上げます。

SHOT 2 · 体育祭前日

先日の出会いから二日後、ホームルームの時間。

俺の目の前には暖かな陽射しで日干しされてる守基と、その隣の席でゲーム機をいじる燈縁がいた。勿論、二人とも話なぞ端から聞いていない。

この学校では“秦戸”と話すときは樋口を間に入れる” という標語がある。だから燈縁が何をしてても特に何も言わない。ほら、蜂の巣になるのは嫌だから。

一応言つておくが俺は殺人帮助した覚えはない。燈縁はまだそこまでしていない。俺の見たところではという前提がつくけどね。

守基に関しては、なんなんだろう。みんな微笑ましく見ている。多分あの顔は癒し系なんだろう。血を舐めたがる変わり者だけど。寝言で“舐めさせろ”って言つてるけど。

が、そんな微笑ましい守基をそのままにしておく訳にもいがず、壇上で書記をしていた男子に言われ、俺は守基を起こした。

今回のホームルームで決めているのは体育祭の出場種目だ。リレー、障害物競争、バレー、バスケ、バトミントンなどなど。高校の体育祭にしては異常なまでの種目数を、今日中に決めなければならぬ。

この学校の体育祭は二日かけて行われる。

一日目に徒競走やリレーなど、所謂運動会を行い、二日目にバレー やバスケをやる。

運動会 + 球技大会 = 体育祭という図式だ。

「三割方決まつたんだけど、守基は何に困るの?」

「ん、と。パン食い競争が良いなー。」

「残念な事に衛生面と予算面から却下。」

その知識はどうこう経路から入手したんだ? いまどきパン食い競争なんてやらないだろ?」

「ええ…残念。お昼代浮くかと思つたのに。」

「給料日前?」

「うん。当田は一人とも留守だし。」

守基の家計が苦しいのは周知の事実だ。新卒の兄と高卒の姉、守基のバイト代で守基の家は成り立つている。

その状況でよくここまで明るく暮らしてゐるなど思ひ。それだけだ。可哀想とは思わない。自分の幸せは自分が決めればいいと思つから。

「そもそも、パンひとつも保つと懲りへ。」

「あ…。」

なんだその『今氣が付きました』的な顔は。

「足りないよー。どうしようつづりー。」

「俺に聞くくな。さつかも言つたけど、パン食い競争はないかい。」

「わうだつたー。」

…見てるこいつちが逆に冷静になる部類の慌て様。

完全に当てが外れたという状態なんだろう。守基は危機に対しても暴走、後に自滅するタイプだ。

「わかつた。分かつたから、弁当作つてやるから。黙れ。」

「…飛鳥がテレた。」

「はあ？」

「俺様だつて飛鳥に弁当作つてもうつた事ないのに。飛鳥つて可愛いもの好きなんだな。初めて知つた。」

「俺の弁当つまみ食いを越した横取りをしていた奴が何を言つたか。」

「こいつはこの通り体格がいいからよく食べる。だから俺の弁当の七割は奴の腹の中に収まつてた。」

俺が小食なため、でつかい弁当ひとつで丁度良かつたが、俺が人並みに食う人間だつたらどうするつもりだつたんだ？古野坂さんが燈

縁の弁当を作るよつになつて俺の負担がどれだけ減つたことか。

その負担が古野坂さんに行つたところとは古野坂さんが大変になるところだが、彼女はあれで相手に頗くすタイプだから、苦ではないだらう。

料理はあまり得意ではないと聞いたとき最初はどうなるかと思つたけど…よく考えたらあれだけ彼女煩惱な燈縁だ。どんなに不味くても喜んで食べてしまうんだらう。

…あの時は、ゆで卵を電子レンジで作つとするとから本氣で焦つたなあ…。

「だいたい、お前は古野坂さんが弁当作つてくれるだり?まだ諦つ氣なのか?」

「飛鳥!俺にも弁当作れ!」

「お前は隣のクラスだらうがつ…」

勢い良く扉を開けた非常識男には取りあえず消しゴムを投げつけておき、燈縁に尋ねた。

「みほるちゃんと飛鳥は別腹だ。」

「別腹つて体に良くないいらしげね。」

「俺様みほるちゃんの為なら死ねる。」

「刺されても？」

「串刺しこされても。」

うん。これならどんな料理が出ても燈縁の奴は元食するだろ。それ程までに燈縁の彼女煩惱は素晴らしい。真似したくない。

「奏刀って愛に溢れてんのな。」

「やうか?なら分けてやるよ。」

ん?燈縁の奴が怪しい宣教師みたいなことを言つてる。

「殺し合いだがな。」

「は、え、ちよつ、おまつー。」

殺氣を感じたらしい一富は逃げた。それはもう猛ダッシュで。燈縁はそれを追つた。それはもう猛禽類のような目で。

とりあえず、俺は十字を切つた。そして、今度こそ一富がくたばるよつて、心の底から神様にお願いしたのだった。

SHOT-3・戦線未ダ動キ無シ

そして、体育祭当口。

天気は良い具合に晴れている。カンカン照りではない、晴れ半分曇り半分のハッキリしない天気だ。

「やっぱり体育は曇りに限るね。」

「俺は嫌だ。寒い。」

「あー…灌富は寒いの苦手だからねー。」

寒がりな人間には些か酷かもしれないが、走つたら暖かくなる筈だ。
走つたら。

「灌富は何に出来るの?」

「俺?俺は生徒会云々の関係で、全員参加の種目にしか参加しないよ。」

「へ?」は…綱引きと棒倒しと騎馬戦、か。」

「そゆこと。」

灌富は役員だから、忙しいんだろう。

何せ来年度生徒会会長、最有力候補だ。上からも下からも頼まれ事満載なんだと思つ。灌宮は世渡り上手で外面は良いから。

「あーすかー！」

「あ…守基。」

「ねえねえー今田のお弁当おかず何? 気になつて気になつてしうがなく…て…。」

「比企村! 一度いい所に!」

俺と話していた灌宮はにじりにじりと俺に近寄る。

正確に言つと、俺の後ろに隠れたまま固まつて立る守基。

「俺今ね、すひじへいりいりしてゐるの。」

「え? ええ?」

「なんか色々雑用押しつけられちゃつた。不幸だと思わない? 可哀想だと思わない?」

「へ、ひつとー全然…。」

「やーじ、や。比企村。」

「な…なんだよお…。?」

「遊べ。」

[REDACTED]

守基は何とも情けない悲鳴をあげて逃走していった。

その後を爽やかな笑顔で追いかけていく灌木。

…これが瀬宮流の“ストレア触消法”なのだが、

ステイックでも可愛く聞こえるんだから、言葉つてのは偉大だ。

「所で都ちゃん。何か用？」

「あ、あの……えっと……」

いつの間にやら背後で体操服の裾を引いていた都ちゃんに用件を訊ねる。

正直、さつきまで気がつかなかつた。

「いれ……淫靡さんのですよね……？」

おずおずと差し出されたものは…鍵だった。自転車の鍵。

「さつき走つていつたとき落としたみたいで……」

「あー、なるほどね。灌富の奴ポケットに入れっぱなしだったんだ
…。」

「…」

「…」

「…おおつと最後まで聞き取れないぞ？声が小さくて聞こえない。
多分「渡しに行つた方がいいですよね？」的な事を言つてゐるんだと思つたが」

「…都ちゃん、あつちの本部の方まで届けに行つたら？」

「え…でも…」

「本人に直接は無理でも、本部なら灌富も絶対に寄るだらう」

「あ…せつですよね…。はい、行つてきます」

都ちゃんはトテトテと本部の方へ向かう。

「しかし、何故だか都ちゃんの様子がおかしい。」

都ちゃんは灌富の事苦手だつて言つてたのに、なんでもまた急に渡そ
うなんて考えたんだね。」

「まさか…まさかね。」

「後輩がリア充になりそうですね。」

「ああそれなんてフラグ？」

「飛鳥一、集合だぞ」

「今行くよ」

燈縁に呼ばれ、クラスの列に並ぼうと駆け寄る。ふと燈縁が担いでるそれに気がついた。

「それ何?」

「後ろに居たる? 気づかなかつたのか?」

「…全然」

燈縁は数人の男を担いでいた。全員ピクリとも動かない。氣絶しているらしい。

ていうか本当に気がつかなかつた。こいつら誰?

「氣いつけるよ。テンション上がると悪ノリする奴が増えつから」

「…あれとか?」

「飛鳥、二人三脚手伝え」

「あれは何時もだろ。一面对て、ゴルア」

「うわつ怪人だ逃げろーー!」

「開会式終わるまでには戻りなね」

「おうよ

「つよーかい

「面に言つたつもりはない。

…あーあ、俺もサボるうかな。開会式。

「樋口君、開会式始まるよ」

「あー…うん、分かつた」

「どうか、古ノ坂さんが一人になるのか。

それは、マズイよな。流石に。

…よし、腹くくつて開会式出よう。そうしよう。

「燈縁君は?

「おーかけつー」

「…やつ、おいかげつー…」

……寒い。

ここだけ妙に気温が低い……。

あれ、だろうなあ……。最近一富ばつか追いかけ回してゐるから……。——

富、食い物と背後と夜道には気をつける。

「開会式終わるまでは戻るから、ね？」

「……わかった」

燈縁、早く戻つてこいよ……？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5579f/>

暴走青春 マシンガン

2010年11月2日11時34分発行